

「一緒に声を出してくれる」おっちゃん になろう

弊社の事務所がある熊本市の子飼商店街では、お昼と夕方の2回、小学生の声で吹き込んだ次のようなアナウンスが、スピーカーから流れる。(これを元気のよい声で10回繰り返す。)

全員：子飼商店街へ、ようこそ～！

女子：お買物中の皆さんにお願いがあります。碩台小4年生は、子飼商店街の中で活動をしています。そこで、気づいたことがあります。

男子：子飼では、自転車に乗ってはいけないのに、たくさん乗っている人をみかけます。ぼくたちは、自転車ストップ運動を行なうことにしました。

全員：自転車ストップ運動～！！

女子：商店街で自転車に乗るのは危ないです。自転車を降りて押していきましょう。通行人が、困っています。自転車を降りて、商店街を歩きましょう。

全員：自転車ストップ！ ご協力を、お願いします。

子飼商店街は、9時から19時まで車両進入禁止である(歩行者専用で自転車も走行はできない)にもかかわらず、ほとんどの人が、ビュンビュン自転車を飛ばしていく。特に、夕方は大学生たちがバイトや遊びに行く際に通過していく。自転車にとっては、最も“安全な”中心市街地への近道である。しかし、小学生の指摘通り、通行人は困っている。自転車と通行人の接触事故もかなり発生している。

地元の碩台小学校の児童が、総合学習の一環で、商店街の美化活動などをしてきている。11月に行なわれる商店街のイベントでは、小学生たちが、合唱や学習成果の発表をしてくれる。商店街からも授業に出向く。その関係から、先のアナウンスのCDを作ってくれた。

スピーカーから子どもの声が流れると、一瞬、気まずい雰囲気が商店街を支配する。慌てて自転車を降りる人もいるが、それは、ごくわずかに過ぎない。若干スピードダウンする人もいる。ほとんどの人が、気まずい表情をしながらも、自転車を降りることはない。

先日、お昼前の時間帯に、子どもたちが、実際に「自転車ストップ運動」をしてくれた。胸に「自転車ストップ運動」のプラカードを下げ、頭にはお揃いのバンダナをして、4,5人のグループで通りを歩きながら自転車に乗る人に注意を促した。これは、さすがに効き目があった。自転車で走ってきた人は、最初のグループと出会って状況を知り、次のグループの姿が見えたところで早々と自転車を降りて歩き始める。(商店街の長さは約400m)なかには、猛スピードでやってくる自転車があり、子どもが声をかけることもできないことがあった。

小学生の授業は慌ただしい。突然やって来て、あっという間に去っていった。私はこの間、記録写真を撮るばかりで、一緒に声を出すことはしなかった。他の店主たちも、子どもの授業参観のような態度で傍観していた。問題の本質は、自分たちの商売の環境であり、他人事ではない。一緒に「自転車ストップにご協力ください」と連呼すればよかった。小学生は、それが一番嬉しいはずだ。・・・次の授業はいつかなあ？君たちがいないとちょっと恥ずかしい。